

平成25年度 第25回 卒業証書授与式 式辞



今日は、寒の戻りなのか肌寒い日になりました。しかし、校門の桜の蕾は膨らみはじめ、新たな命を育む春の息吹を感じる季節になってきました。この佳き日に、大阪府立日根野高等学校第25回卒業証書授与式を挙げるにあたり、(大阪府教育委員会を代表して、地域教育振興課総括主査 山本有美子様、泉佐野市教育委員会学校教育課指導主事 道浦敏幸様、地元中学校の校長先生方、)をはじめ多数のご来賓並びに保護者の皆さまのご臨席を賜りました。卒業生はもとより本校教職員一同にとりましても心からの慶びであります。高いところからではございますが、心から厚く御礼を申し上げます。

さて、ただ今、所定の課程を修められ卒業証書を授与された208名の卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。本日こうしてめでたくこの日を迎えられたことに対して心からお祝い申し上げます。また、これまで成長を見守ってこられた保護者の皆さまにおかれましても、本日の晴れ姿をご覧になって、さぞかしお喜びになっておられるものと拝察し、心からお慶び申し上げます。

卒業生の皆さんは今、過ぎてしまえば長いようで短かった3年間のたくさんの思い出とともに、輝かしい未来にむけて、夢と希望に胸ふくらませ、この場に臨んでいることと思います。

思い起こせば、昨年の夏頃から、皆さんの活躍する良い知らせがたくさん届くようになりました。陸上競技部の近畿大会二大会連続出場からはじまり、女子バレーボール部の春高バレー決勝ラウンド出場、公立高校大会で悲願の初優勝、バドミントン部は泉佐野市民スポーツ大会で準優勝、美術部の高校美術工芸展で絵画部門と立体部門で各々が優秀賞受賞、吹奏楽部は13年ぶりの吹奏楽コンクール大阪府大会で優秀賞を受賞、ハンドメイド部は和菓子甲子園に出場し奨励賞を受賞、ダンス部は関空をはじめ各地域でパフォーマンスを披露、また一昨年、日本初の高校生トレーナー誕生で話題になったCSP(コモンセンス・ペアレンティング)で、今年もまた7名のトレーナーが誕生し、アメリカ本部から表敬訪問があり、交流を深めることができました。このように、次から次へと本当に素晴らしい成果を挙げてくれました。

その度に、校長室にいい知らせが届き、本当に嬉しく思いました。報告に来てくれた皆さんと話をしていると、その表情がまるでダイヤモンドの光の如くキラキラ輝いて見えて、そんな皆さんを見ているのが、私は大好きでした。一人ひとりが私の大事な宝であると同時に誇りに思えたものでした。

そのほかにも、ボランティア部が、「こころの再生」府民運動に参加し、佐野支援学校との交流も深めました。また、イオンモール日根野において、昨年に引き続き、美術部・書道部・ハンドメイド部の作品発表と吹奏楽部・ダンス部の発表会が開くことができました。家庭科の授業で、日根野保育園で保育体験の実習をさせて頂いたり、学校外においても地域連携に活躍してくれました。

そんな25期生とは、3年間という同じ時間を共に過ごしてきました。沖縄への修学旅行も一緒に行き、学校では見られない違った一面も垣間見ることができました。それだけに、授業や行事・クラブ活動を通して皆さんと共に過ごした時間は、本当にかげがえのないものになり、そのたびに勇気や元気を一杯もらうことができました。

今回の卒業証書も昨年に引き続き、僭越ながら、私が自ら筆を執って一枚一枚、気持ちを込めて皆さんの名前を書かせて頂きました。一人ひとりの写真を見ながら進路状況と重ね合わせて、その成長ぶりに思いを馳せながら書かせて頂いた時間は、本当に幸せな瞬間ときでした。

さて、今年に入ってから話題と言えば、新型万能細胞「STAP細胞」を開発した若き女性研究者のおほかたはるこ小保方晴子さんのこと。そして、ロシアで開かれたソチ冬季オリンピックではないでしょうか。一つ目の小保方さんの研究については、発表後、物議をかもしているところも少しあるようです。

しかし、「STAP細胞は必ず人の役に立つ技術だ」との信念を貫き、膨大なデータを集めながら「何度もやめようと思ったけれど、あと1日だけ頑張ろうと続けてきて、いつの間にか今日に至った」と話されています。高校時代にたまたま手に取った科学雑誌の特集記事で「社会に貢献できる」と再生医療に強い興味を持ち、研究者への道を選んだそうです。

もう一つの話題と言えば、やはり、ソチ冬季オリンピック。国外での冬季五輪としては最多の113人の選手が参加した日本は、金1、銀4、銅3の計8個のメダルを獲得し、1998年長野大会の10個に次ぐ歴代2番目となりました。

フィギュアスケート男子金メダリストの19歳の羽生結弦選手や、女子フリーで最高の演技を魅せた浅田真央選手、ジャンプで銀メダルを獲得した41歳の葛西紀明選手、スノーボード男子ハーフパイプでは、15歳2カ月で冬季五輪の日本最年少メダリストとなった中学生の平野歩夢選手は銀メダル、同じく高校生の平岡卓選手は銅メダル。

その中でも、女子スノーボードで惜しくも準決勝で敗退した藤森由香選手のコメントが印象的でした。「納得のいく結果にはつながらなかったが、何よりここまで頑張れるように支えてくれたすべての皆さんへの感謝の気持ちが溢れてきた。オリンピックという大きな目標に向かって行く道のりは、夢の中を走り続けて来たようなもの。そのオフロードのような険しい道は本当にたくさんのことや思いを経験させてくれた。そしてそれが宝となった。オリンピックでは、スポーツで国を越えて一つになれる、そんな素晴らしい体験をすることができ、スポーツの魅力が一層引き立ったと思う。」

夢を目指して努力して来られたすべての選手の皆さんに大きな拍手を送りたいと思います。

この二つの話題を通じていえることは「途中であきらめずに最後までやり通す」ということが如何に大事であるかということではないでしょうか。たとえ苦しくても、耐え続ける中に真実は光ってくるものです。ただ、耐え忍びの時は心を強くし、平凡でもいいからコツコツと努力を続けることです。「努力は決して裏切らない」という言葉も皆さんに何度も話をしてきましたが、無限の可能性を信じて努力を怠らず、「夢を形に」を実現してってください。一人ひとりの心の中に眠る「無限の可能性」や「無限の力」を目覚めさせてほしいと思います。そのとき、未来は変わりはじめるのです。

「よく伸びるバネほど、よく縮む」とも言います。皆さんも成長する前には、まず力を溜めなくてはなりません。秋になって、木の葉が散るのは、もの哀しいですが、それは終わりを意味するものではありません。一旦、ゼロになったように見えても、来春の木の芽が静かに潜んでいるのです。見えない生命が、周到な準備をしているのです。

だから、たとえ苦しくても弱音を吐かないで、次の飛躍のチャンスに向けて力を溜め続けてください。十分な力が溜まってきたら、ゴールめがけて一気に駆け出してください。

失敗を怖れず、何事にも果敢にアタックしてみてください。新しいことにチャレンジして、その中で得た発見・驚き・感動を自信に繋げていきましょう。

25期生の皆さんが、本校での3ヶ年の業を終え、これからの未来社会に巣立られるにあたり、「社会が何をしてくれるかではなく、自分が社会に何ができるか」ということを問い続けてください。

皆さんには、未来を創造する力があります。皆さんの持てる若い力が、「より良い社会の担い手」として大いに期待されています。その自覚と未来を担う人間としての使命感を持って、輝かしい未来創造のために益々精進されることを心から祈念して、式辞と致します。

平成26年3月4日

大阪府立日根野高等学校  
校長 牧野 浩二